



小学校

話す・聞く能力を高めるために

「確認型応答」で学習を活性化する

学習の中での話し合いでは活動がとぎれることがあります。このとき「確認型応答（聞き手が相手の話のポイントを確認する言葉）」が有効です。この「確認型応答」を授業で生かすことで児童は、会話をつなぎやすくなります。

第2学年担任のA教諭は次のように「話すこと・聞くこと」の活動を行いました。漫画「ドラえもん」のポケットから出てくるような夢の道具を想像し、紹介し合う単元です。A教諭は、小グループでの話し合いを取り入れようとしたのですが、「どうしたら子ども同士で言葉をつないでいくことができるのだろうか。」と悩みました。

そんな折、A教諭は、B養護教諭が児童と自然に会話している姿を見ました。体の不調を訴える児童に「〇〇さんが、言いたいのは、△△ということなんですね。」と「確認型応答」を使って、児童と穏やかに会話していたのです。A教諭は「確認型応答」を授業で生かしていくことにしました。

大事なことを落とさないで聞く力を高めるために、相手の発表を聞いて、その発表のポイントを「〇〇なんですね。」（確認型応答）と聞く立場から返していく。このことにより、発表者は、安心感とともに意欲をもって話し続けることができる。

国語の授業になりました。3人組になって「あったらいいな こんなもの」を発表します。授業のはじめにA教諭は確認型応答を使うことを3人の児童を代表にし、モデルとして見せました。

小グループに分かれての発表になりました。「何でもさがせるスペシャルライト」を紹介したC児童に、聞き手のD児童は「スペシャルライトでさがしものを見付けたいのですね。」と確認しました（D児童の確認型応答）。（これまでD児童は、話したり、聞いたりするとき、何を言ったらいいのかわからない児童でした。）D児童のこの言葉を受けて、C児童は「はい。このライトは、暗い所でも何でもさがし出せます。」とにっこり笑って答えました。すると相手の様子に安心したD児童は「ぼくも、よくさがしものをします。そのライトは、普通のライトとどう違うのですか。」と質問しました。こうして、グループの中でスペシャルライトの工夫やよさが話し合われていきました。

このように確認型応答の活用は、低学年の児童が発表の場面で友達と生き生きと話すために有効であることが分かりました。また、職員の間でも確認型応答のよさが分かり、中・高学年の確認型応答による「話す・聞く」の実践化にも発展していきました。

中学校

読む能力を高めるために

プレゼンテーション・コンテンツの

作成を読み取りに生かす

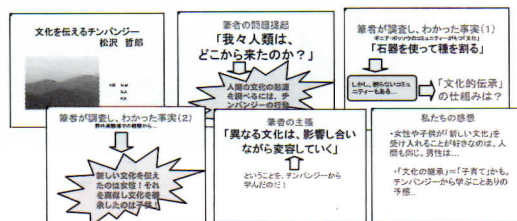
「読むこと」の指導のうち、特に、説明的な文章の要旨や構成を読み取る学習では、ともしれば受け身の学習になりがちで、生徒の主体性を生かした活動になりにくい傾向があります。

読み取りの道具としてプレゼンテーション・ソフト（以下プレゼン・ソフトと略記）を活用し、コンテンツの作成や発表を行うことで、主体的な読み取りを促すことができます。

第2学年担任のE教諭は、説明文教材「文化を伝えるチンパンジー」の要旨や構成を読み取る学習を、以下のように構成しました。

- ・教師の範読、語句の確認、学習課題の確認の後、プレゼンテーション・コンテンツの例示とグループ分けをしました。その際、プレゼン・ソフトの利用経験のある生徒を各グループに配置しました。
- ・各グループで要旨や構成を読み取り、コンテンツの作成をしました。生徒は「事実の記述でスライド1枚、筆者の考察でスライド1枚」というように、コンテンツの1枚1枚に意味付けをしていきます。また、プレゼン・ソフトの機能を駆使して、強調する言葉を探すことが、文章のキーワードや要旨をつかんでいくことにつながります。

（コンテンツ作成例）



- ・各グループが作成したコンテンツを基に、プロジェクトを使って読み取った内容を発表し合いました。それぞれの発表のよくなった点（「文末表現に着目し、事実と考察をよくとらえている。」「接続語に注目しながら、構成を的確につかんでいる。」など）を生徒同士で評価し合ったり、教師が認めながら全体で紹介したりしました。

学習を終えた生徒からは「黒板を使った読み取りよりもとても興味が湧いたし、積極的に文章を読むことができた。」「こういう活動だとグループでの話し合いが楽しく行えて、内容もよく理解できた。」などの感想が聞かれました。